

スタインウェイ物語

ピアノの王様として世界に君臨する、スタインウェイ社のグランドピアノ。その物作りの舞台は、ニューヨークの一角に広がる工場地帯にある。スタインウェイがこの地に工房を開いて130年以上。以来、綿々とピアノにまつわる物語が受け継がれている。美しい音色に一生を捧げる人々の姿を追いかけた。

*Piano
Stories
in*

New York





AGORA Special
Piano Stories in
New York



カーネギーホールにて行われたThe 5 Brownsのコンサート。スタインウェイのグランドピアノがずらりと並んだ。



スタインウェイのピアノはニューヨークとドイツ・ハンブルクの工房で製造されている。



ピアノに音色を与えるヴォイスング。豊かな響きを生み出す熟練の技が要求される作業。



(右) クイーンズ・アストリア地区にある工場。この一角に“スタインウェイ村”が築かれた。(左) ピアノの心臓部である響板の製作。職人が行う手作業は100年以上前から変わらない光景だ。



AGORA Special Piano Stories in New York

(上) 最終点検を行うマスター・整調技師のウォーリー・ブート氏。(中) 巨大なリムが並んだ乾燥室。むせ返るような暑さの中でゆっくりと乾燥させる。(下) 6人がかりで行うリムの加工作業。



薄

暗い工房に熱気が立ちこめていた。屈強な男たちが長さ七メートルにも及ぶ木板を抱えている。総重量は一三〇キロ、厚さ五ミリのメープル材を二七層に重ねた枠板だ。これをプレス機に押しあて鉄製の金具で止めると、やがてピアノ独特の美しい曲線が描かれた。リムと呼ばれる外枠を作るこの作業から、一年がかりのピアノ作りがスタートする。

一晩寝かせたリムは翌朝に乾燥室へと運ばれていく。気温三二度、湿度五二％に保たれた室内で、最低でも六週間をかけ乾燥させるのだ。やがて十分な「休息」を得たリムは工房の中を移動しながら様々な機能を組み込まれていく。内部に支柱が張られ、鉄製フレームや響板が取り付けられる。響板

とは弦の振動を増幅させる板で、美しい音色と響きを生み出すピアノの心臓部だ。響板の上には弦が張られ、鍵盤も揃い、次第にピアノ本体の体裁が整っていく。続いて行われるのがヴォイスングと呼ばれる作業だ。これはピアノの音色を作り出す工程で、最も熟練の技が要求される。弦の張りを整え、鍵盤やハンマーなどのアクション機能を調整する。音程、響き、トーンやタッチなどスタインウェイならではの豊かで滑らかな「声」が生まれていく。

一台のピアノには実に一万二〇〇の部品が使用され、三〇〇名の職人が携わる。大型の機械は一切使用せず、すべてを手作業で行うのが彼らのこだわりだ。じっくりと時間をかけ、妥協を許さぬその姿勢が故に、一日に工房で誕生

するピアノはせいぜい六、七〇台、年間でも一二〇〇台にも満たないという。

スタインウェイの歴史は一八三〇年代のドイツで始まった。創始者のハインリヒ・エンゲルハルト・シュタインヴェーク（英名・ヘンリー・スタインウェイ）は、元は家具職人であったが、次第にピアノ作りに魅了されていった。一八五〇年にはアメリカに移住し、その後、ニューヨークでスタインウェイ・アンド・サンズ（通称、スタインウェイ）を創設する。探求熱心な彼は最新の音響学を学び、様々な部品や機構に改良を加え、革新的なピアノを作り続けた。小さなロフトで始まった工房はやがてマンハッタンのミッドタウンに巨大工場を構えるまでに発展した。当時のニューヨークは南北戦争後の好